

スキヤンダルの両義性

——明治の女学生バツシングから「新しい女」へ——

岡 田 章 子

一、はじめに

「スキヤンダルは女の勲章」——このフレーズは、筆者が九〇年代にある女性雑誌の編集者をしていた折り、編集部内で物議を醸した特集タイトルである。特集の本身は、要するに、ピリー・ホリディやジョージア・オキーフ、エディット・ピアフといった、波瀾万丈の生涯を生き抜いて燦然と輝いた女たちの列伝、といった趣なのだが、編集長が半ば独断で決めたこのタイトルに、編集部内で批判の声が上がったのは、無理からぬことではあった（ちなみに、編集長も批判者のベテラン編集者も皆女性であった）。曰く、女ゆえの艱難辛苦を乗り越えて偉業を成し、あまつさえ彼女たちを理想の女性として取り上げようというとき

に、その偉業がまるでスキヤンダルのたまものであったかのような物言いは、何事か。対する編集長にしてみれば、様々なスキヤンダルをもともせずに、あるいはそれを肥やしにしさえして成功を手にした女たちこそ、輝かしいのだ、ということになるのだろう。

ここで論じたいのは、無論、このタイトルや特集の是非ではない。筆者が明治の女性たちをとりまくスキヤンダルについて論じるにあたり、このタイトルをめぐる応酬を想起するのは、それが「スキヤンダル」やそれに伴う「有名性」を持つ両義性に呼応したものだ、と思ひあたるからである。すなわち、マッシュアルによれば、有名性あるいは有名人 (celebrity) とは、「社会的世界の成功や業績を表現している」。その一方で、有名性はしばしば実体がなく、

まったくのイメージにすぎないもの、という負の意味においても捉えられる！。有名性とは裏腹の「スキャンダル」とは、無論「醜聞」なのだから、元來名声ある者の失墜を意味する。しかしながら、それが有名性と裏腹であるがゆえに、われわれは逆のメディア現象もまた、ごくありふれたものとしてしばしば眼にする。すなわち、それはスキャンダルによってもたらされた「知名度」を足がかりに、なにがしかの業や成功を手にする人々、である。無論、そうした人々は、負の意味での有名性において捉えられがちだが、有名性それ自体が両義的である以上、それがイメージにすぎないものか、本物の成功かは、有名性を承認する人々に委ねられる。その意味で、「スキャンダル」もまた、字義通りの否定的な意味のみならず、有名性においてプラスにも作用しうる。つまり、例え悪名であっても、「名を挙げる」という意味では同じこと、要はその有名性を、どのように生かすか、あるいは生かされるかが、社会的な成功の鍵なのである。

いうまでもなく、こうしたスキャンダルのプラスの作用を「活用」するに至るには、「名」を流通させる近代的なメディア空間そのものの確立が不可欠であった。果たして、日本において、こうした有名性の流通という現代にも通ず

るメディア現象が成立したのは、いつだったのか。ここでは、明治の女性たちのメディア表象をてがかりに、スキャンダルが両義的な作用を持つに至る経緯について考えてみたい。

二、「名」も「実」もない醜聞——明治二〇年代の女学生バツシング

まずもって醜聞という意味でのスキャンダルが成立するためには、注目に値する新奇性と、それを失墜させるに足る社会的な優位性がなければならぬ。明治中期、鹿鳴館政策の失敗とその反動から国粹的な機運が高まり、その時流に乗って新聞メディアにおいて格好の標的とされたのが「女学生」であった。留意すべきは、明治三一（一八九九）年に高等女学校令が發布されるまで、女子の中・高等教育はごく一部の「開明的な」社会層において可能であったにすぎず、しかもその例外的な女子教育を担っていたのは、大半がキリスト教系の女学校であった、という点である。

「女」という性を好奇の対象として眼差すメディアの視線と国粹反動の機運が相まって、明治二〇年代には、キリスト教主導の女子教育および女学生が、いわれのないバツシングにさらされた。ここでいう「醜聞」とは、後に有名

性と結びついて両義的な意味で作用する「スキャンダル」とは異なり、「醜聞」の主が特定されることもなければ、その事実性さえも定かでない代物であった。例えば、『読売新聞』は明治二二（一八八九）年六月一三日「再び女学生と女学校を論ず」を皮切りに、女学生バッシングを加速させ、「筆誅」と称して「女学生の醜聞」（明治二三年二月二〇—二八日朝刊三面）という大々的なキャンペーンを張った。ここでバッシングされる匿名女学生の行状とは、学費が足りないと言う女学生を下女として雇って見たら妊娠していたとか（明治二三年二月二〇日）、同じ下宿の書生と「道なれぬ契りを籠め」私生児をもうけた（同年二月二三日）、など多くは性的に淫らかなものと結びついており、あたかもそれが西洋流の教育によってもたらされるかのような論調である。曰く、

婦人の品行方正なる国柄なるも尚斯くの如き仕組み（墮胎のための病院：筆者注）の必要なるべきか。これらの事実より考ふるときは、彼の某將軍が西洋巡回より帰りたる時宇内広し雖も日本ほど婦人の謹慎なる国はなし云われざるも強ちに過実の言ならざるべし。西洋における男女同権的教育の弊之に倣う日本人の愚明

白なりと云わざるべからず。わが輩はこれらの事実より推考して女子教育を全く西洋風たらしむるの危険を畏れざるを得ざるなり（明治二二年六月一三日「再び女学生と女学校を論ず」）

こうした根も葉もないバッシングに対して、キリスト教メデアである『国民新聞』は女子教育者からの事実に基づく反論を促し、『女学雑誌』（明治二三年三月一日二〇—二五号）のほうは、徒に不確かな風説を煽るのではなく、氏名を公表し世に真偽を問う報道をせよ、と事実報道に徹するジャーナリズムとしての役割を要求した。こうした「名」も「実」もない「醜聞」は、実は前年に女学校女性教師の腐敗をネタにした嵯峨の屋おむろの「くされたまご」（『都の花』明治二二年二月号）や「濁世」（『改進新聞』明治二二年四月から五月連載）のような女学校の「腐敗」イメージをふりまく他のメデアの連載小説とも連動していた。屋木によれば、小説「濁世」の主要人物は、東京高等女学校校長、矢田部良吉をモデルにしており、作者は、作品中に、矢田部が行った実際の演説を取り上げるなど「実際の事象を織りませながら小説を展開させることで、スキャンダラスな波紋を社会に投じたのである」²。

こうした風潮の中で、まるで「濁世」の続編でもあるかのように、まさに矢田部の勤務する東京高等女学校を舞台として『国の基』^{もとむ}事件が起こる。『国の基』事件とは、同校教頭、能勢栄が自ら主宰する雑誌、『国の基』第三号（明治二十二年六月一日）に、「教育ある女子にして安全なる夫婦併立の生活を遂げんとする者は如何なる男子に嫁すべきか」という論説を書き、その中で「文学士か或いは理学士」以外の男性は不適當であるかのような議論を展開、これがヒステリックな女学校批判を呼び起こし、問題となった記事を書いた能勢栄並びに同校長矢田部良吉が免職、同校も翌年廃校とされるに至った事件である。

この時期のこうした反動世論の勢いに、特にキリスト教系女学校を中心にしてこれまで漸増していた進学希望者も激減したため、一連のバッシングに対し、キリスト教メディア陣営が、「名」と「実」を伴う報道を求めたのは当然のことだったし、これによって女子教育が被った痛手は看過できないものであった。

しかしながらここで問題にしたいのは、これらのバッシングがいかにかに女性差別的でかつ女子教育の発展の妨げになったか、という点ではなく、そうした表象が明治中期という時代において、いかなる意味をもち、それが近代メ

ディアの確立過程でどのようなものに変容していったのか、という点である。

奥によれば、明治期のスキャンダルは、高橋お伝に代表される「毒婦物」といった「小新聞の「つづき物」として登場した」³が、やがて虚実入り交じる「つづき物」は、フィクションとしての連載小説に道を譲り、いわゆるスキャンダルは、例えば『万朝報』の「蓄妾の実例」のように、著名人の蓄妾の事実を前提としてそれを暴露する報道に軸足を移していった、とされる。こうしたスキャンダルは、「国民」から逸脱した存在を糾弾・排除し、かつ近代家族規範との衝突をクローズアップすることで、国民国家における、あるべき均質な国民を創り出すことに寄与する「制度」だったという⁴。

明治中期の女学生バッシングは、連載小説と、これも連載企画による「名」も「事実」も定かならぬ「醜聞」報道において展開されたという意味で、「毒婦物」から事実に基づくスキャンダルへの過渡期に現れた、国粹的風潮における新たな攻撃のターゲットだったと見ることができ。すなわち、こうしたバッシングは、新聞読者大衆の性的な欲望と、この時期欧化への反動を通じて確立しつつあった国民としての自覚とを同時に満たすものとして機能していた

のである。

ところで、新聞メディアにおけるスキヤンダルのその後について、奥は「高度大衆社会」という枠組みを示唆するのみでその行方の詳細を語っていない。加えて、毒婦から女学生という明治期スキヤンダルの重要なターゲットをジェンダーの視点から捉えるならば、メディア、あるいはそこで繰り広げられるスキヤンダルにおける、女性に向けた好奇の眼差しについて考察しないわけにはいかない。次節では、「名」も「実」もないバッシングがもはや近代的なメディアとして通用しなくなった時代、すなわち、「醜聞」が「実在」を伴った「名」をこそ奇貨とする「スキヤンダル」としてジャーナリズムを席卷するに至ったとき、女性とメディアの関係がどのように変容したのか、を平塚らいてう、および「新しい女」をめぐる表象において見ていくことにする。

三、「新しい女」、平塚らいてうの誕生

女がスキヤンダルに結びつくとき、われわれは先に見たような明治以来のメディアの眼差しを前提に、なにがしか否定的な、あるいはそれに対する批判的な感情を抱かないではいられない。しかしながら、メディアにおける女性の

表象を考えると、それがいかに差別的なものであれ、メディアが好奇の眼差しを代表する限りにおいて、その初めから、これほど「女性の存在」を強くアピールせずにはおかなかった近代制度も他にはなかった。無論、そこで展開される女性に対する揶揄や侮蔑、あるいは公然と男性とは画されたダブルスタンダードといったものは、前節での女学生バッシングのみならず枚挙にいとまがないのであるが、近代的なメディア空間が確立していく過程で、名を持った実在の女性がメディアによって力を得ていくという現象も確かに生じていたのである。ここではこうしたスキヤンダルの変容に伴って有名性を獲得し、言論人としての地位を占めるに至った女性の代表として、平塚らいてうがいかにして時代を代表する「新しい女」として認知されるに至ったかを、辿っていく。

平塚らいてうといえ、まず「元始女性は太陽であった」のマニフェストで知られる『青鞥』の編集人、大正デモクラシーのうねりの中で誕生した日本を代表するフェミニストとして想起される。しかしながら、ここで重要なのは、なぜ「青鞥」という雑誌が平塚らいてうを編集人として誕生したのか、という点である。

よく知られるように、『青鞥』は、明治四四（一九一一）

年九月、生田長江が自ら主宰する閨秀文学会（後、金葉会）に参加していた平塚らいてうを編集人に、保持研子、中野初子、木内錠子（『婦人世界』記者）、物集和子（夏目漱石門下、『女学世界』編集者・物集梧水の妹）の五名を發起人として創刊された女性の手による文芸雑誌である。閨秀文学会とは、長江が自ら講師を務めるユニヴァーサリスト教会附属成美女学校内に設けた女性向けの文学講座で、長江をはじめ、与謝野鉄幹・晶子、馬場孤蝶、森田草平らが講師に名を連ねていた。

長江がらいてうを編集人に据えたのは、いうまでもなくその知名度を利用したからで、「らいてう」を名乗る以前の本名「平塚明子」の名は、あるスキャンダラスな「事件」によってすでに広く知られるところとなっていた。すなわち、その事件とは、明治四一（一九〇八）年三月に起こった「煤煙事件」とも「塩原事件」とも言われる平塚明子、森田草平との心中未遂事件で、前者の名は、森田が師の夏目漱石に勧められて翌年元旦から五月一六日まで『東京朝日新聞』に連載した「事件」の顛末を小説化した際のタイトルによる。後者は、二人が事件を起こした場所にちなむが、これは後に、森田の小説『煤煙』に対して、らいてうの側から書かれた『峠』（『時事新報』大正四年四月一日か

ら二一日連載、未完）を意識して前者の一方的な立場からの「事件」を相対化する視点からの名であろう。

ともあれ、この事件はいわゆる「情死」の趣とはいささか異なっている。すなわち、それは相思相愛ながら道ならぬゆえの心中ではなく、森田は終始相手の女性の不可解な言動にふり回されていたらしいこと、その女性、平塚明子は政府高官の令嬢にして当時の女性の最高学府日本女子大文学政科の卒業生で禪にも造詣が深い異色の「禪学令嬢」であったこと、さらに森田の師、漱石が事件を受けて「大人の対応」として結婚の申し入れをし、それを断られたところ、彼女を「無意識の偽善者」と称し後に『三四郎』に登場する美禰子のモデルとしたこと、等々この事件は、単なるスキャンダルを超え、文学史上に大きな「功績」を残した、とされる⁵⁾。

師として森田をかばい立てし、その後の身の振り方まで世話するとともに、「事件」を自らの創作にまで結実させた漱石に対し、森田の友人でもあった長江は、むしろスキャンダルを利用し、らいてうをしてフェミニストとして世に出すいわばお膳立ての役割を果たした。『煤煙』に続く森田の『自叙伝』の連載が明治四四年四月二七日から七月三一日、『青鞥』創刊号の広告がその『東京朝日新聞』の一面に

掲載されたのは、同年九月三日（『大阪朝日』は翌日五面）、
広告は当初朝日、国民、読売を予定していたにもかかわらず、
東京・大阪の両『朝日』に絞って掲載されたというから、
『青鞥』の発刊はまさに事件による知名度を最大限に
利用したものであった。

さらに、もともと近代演劇論として坪内逍遙により言
及された「新しい女」を、文字通り自らを語る言葉として
定着させていった過程にも、スキヤンダラスな報道を利用
したメディア戦略が窺われる。すなわち、「女流の天才を生
まん」ことを志した文学雑誌が、やがてフェミニズム運動
を先導する雑誌となっていく背景には、らいてうを中心と
する同人たちの、スキヤンダルを逆用するかのようなメ
ディア実践が決定的な意味を持っていた。その口火を切っ
たのは、草平の『自叙伝』に導かれてらいてうに接近し、
同人となった尾竹紅吉であった。自らの異国会展の入選を
「日本酒と、麦酒と洋酒」で祝い（『編輯室より』明治四五
年六月号）、はては「吉原登楼」におよぶという破天荒な彼
女の振る舞いは、他の同人たちにさえ心配と危惧の種で
あった。ところが、らいてうはむしろ『青鞥』に臆面もな
く彼女との同性愛的な関係を披瀝し（『円窓より』明治四五
年八月号）、それらの記事に目を見張る他のメディアをも

賑わせた。こうしたメディア実践がバッシングをものとも
しない自己宣伝でなくてなんであろう。佐々木曰く、「ス
キヤンダラスな話題性が将来的に女権の拡張を呼び込む、
という明確な意識があったか否かはともかく、スターとそ
の軍団の自己神話化の営為に、このころのらいてうがむし
ろ積極的であったことは明らかである」⁷。

ここに至って、「新しい女」は近代演劇論から大きく逸脱
し、『読売新聞』の連載コラム「新しい女」において『青
鞥』が新しい女の代表的団体であることは今や天下の等し
く認むるところ（五月一四日）とされるやジャーナリズム
において『青鞥』に対する数々の中傷、非難や批判が席捲
する。一方、らいてうも自らその向こうを張って、翌大正
二年はじめ『青鞥』で「新しい女、其他婦人問題について」
を「附録」に掲載するとともに、『中央公論』では「自分は
新しい女である」と高らかに宣言するのである⁸。

こうした「新しい女」をめぐる報道は、女学生バッシン
グから相も変わらず、保守的な規範に合わぬ女たちへの好
奇と侮蔑の入り交じった視線に貫かれていたのだが、違っ
ていたのは、具体的に名指されたスキヤンダルの主が、報
道の思惑とは別な意味においても人々を引きつけ、しかも
その本人がそれを自覚していた点である。すなわち、それ

は「ジャーナリズムが冠した蔑称をみずから引き受け、それを利用し、応じることで自分たちの主張をアピールする戦略」への自覚であった。

四、メディアにおける女性——スキャンダルとその逆用における可能性

『青鞥』の母体となった閩秀文学会は、馬場孤蝶のほか、平田秃木、戸川秋骨ら『文学界』同人を講師に擁し、「女性と文学」をテーマにしていた点において、『文学界』の母体であるキリスト教系婦人啓蒙誌『女学雑誌』を中心とする明治中期の女学生文化の連なりに位置する。しかしながら、いわれのないバッシングをくぐり抜け、世に認められた津田梅子ら『女学雑誌』に連なる有力女性たちは、いわゆる「新しい女」に対して批判的であったという。それは、メディアによるバッシングの標的となるという類似の立場に立たされながらも、より広く多様な読者大衆に「名」を売ることが可能になった「新しい女」、平塚らいてうをして、スキャンダルを奇貨として有名性に転化させる「したたかさ」を身につけ得たことに対する苛立ちがあったのかもしれない。

メディアにおいて、時代に先駆ける女性たちは常に、非

難と侮蔑の対象であった。しかしそれと同時に、彼女たちに好奇の目を向けないではいられなかったメディアは、政治的教育的不平等がまかり通っていた時代にも、彼女たちの「存在」をとにもかくにも認めずにはいられなかったし、さらには彼女たち自身に発言の場を与えずにはおかなかった。そしてメディアが名を持った人物の事実を報道するものと広く認知され、同時に大衆読者を獲得したとき、スキャンダルもまた、その標的にされる当の本人においても利用可能な戦略の一環となったのである。

枚挙にいとまがないメディアの女性に対するバッシングは、無論、批判の対象であり続けるけれども、同時にそうしたメディア空間のなかで、スキャンダルを戦略的に逆用し、女性たち自身が自らをプロデュースしていった「したたかさ」のなかに、彼女たちが開いた可能性を見ていくこともできるのではあるまいか。スキャンダルは確かにうさぐさいものであるけれども、自らをスキャンダルの主人公として演出していく「蛮勇」によってこそ、『青鞥』は単なる演劇論を越えた時代を睥睨させる「新しい女」を世に送り、生田長江が最初に構想した穏健な女流文芸誌の枠を遙かに超えた、墮胎や旧弊な結婚制度を問題化する「フェミニズム」雑誌となっていたのである¹⁹。

【注】

- 1 ED. マーシャル著、石田佐恵子訳『有名人と権力——現代文化における名声』（二〇〇二年、勁草書房）序文
- 2 屋木瑞穂『女学雑誌』を視座とした明治二二年の文学論争——女子教育界のモラル腐敗をめぐる同時代言説との交錯『近代文学試論』三五号（一九九七年、広島大学近代文学研究会）六頁
- 3 奥武則『スキャンダルの明治——国民を創るためのレッスン』（一九九七年、ちくま新書）八九頁
- 4 奥、前掲二一七—二一八頁
- 5 佐々木英昭『新しい女』の到来——平塚らいてうと夏目漱石』（一九九四年、名古屋大学出版会）では、この文学史上の功績を、「よく知られた婦人運動家としての活動を表とするなら、知られざるこの功績を裏」と呼んで、「平塚らいてうという輝ける肖像の裏側を照らし出す」（二ページ）とともに、それに関わった森田草平、夏目漱石らの以後の文学活動について詳細な検討をおこなっている。
- 6 藤木直実、「『青鞥』のメディア戦略」日本文学協会新・フェミニズム批評の会編『『青鞥』を読む』（一九九八年、学藝書林）四四四—四四六頁
- 7 佐々木、前掲、一一二頁
- 8 以上、「新しい女」報道への応酬」については、藤木、前掲、四五四—四五七頁
- 9 藤木、前掲、四五六頁

10 大正二年『青鞥』五月号の「編輯室より」には、「生田先生（長江氏）が本社と特別に深い関係ある方のやうに世間の人々が考へてゐられるやうですが、それは先生に於いても定めしご迷惑とせられることだらうと思ひます。ここに本社に関する一切の責任は最後まで只私共同人の上に明にしておきます」と、生田長江との「決別」が宣言された。この決別の経緯、および長江の女性観については、池川玲子「生田長江と『青鞥』——幻の演説をめぐって」日本文学協会新・フェミニズム批評の会編『『青鞥』を読む』（一九九八年、学藝書林）に詳しい。

（東海大学文学部准教授）